

栃原岩陰遺跡マガジン

TOCHIBARA ROCK shelter site MAGAZINE



北相木村の考古学最新情報と
考古学界隈のトレンドを紹介するフリーマガジン

CONTENTS

- ◆ 特集 ▶ もう一度「坂上遺跡」へ
- ◆ 学術論文 ▶ 「長野県栃原岩陰遺跡から出土したカワシンジュガイ属について」
吉永 亜紀子
- ◆ 連載 ▶ 北相木村に呼んでみましたー番外編ー
昭和女子大学歴史文化学科の皆さん
- ◆ 考古学リレーエッセイ ▶ 小松 隆史
- ◆ 北相木村考古学ニュース ▶
栃原岩陰遺跡土器の胎土分析
- ◆ 新刊紹介 ▶ 五十嵐ジャンヌ著『洞窟壁画考』
- ◆ 佐々木由香さん尖石縄文文化賞受賞
- ◆ 学芸員のフィールドノート



PHOTO：坂上遺跡出土 縄文時代後期の入子状埋甕

もう一度 坂上遺跡へ

北相木村最大の遺跡はどこか 北相木村では、現在21箇所が遺跡として登録されている。最も著名なのは、やはり国史跡でもある栃原岩陰遺跡であろう。

栃原岩陰遺跡は約11,000～9,000年前の縄文時代早期の遺跡として知られている。出土品には土器や石器のみでなく、人骨をはじめとする各種有機質遺物もあり、まさに「山国のタイムカプセル」といった遺跡である。遺物の量で言えば、現在のところこの栃原岩陰遺跡が一番であろう。しかし、栃原岩陰遺跡の面積は狭い。主に調査された岩陰部は約60㎡。指定の範囲を含めても600㎡ほどではない。

そこで今回紹介したいのが、村のほぼ中央、坂上・中尾地区に広がる「坂上遺跡」である。

坂上遺跡とは 北相木村の中央を西に向かい流れる相木川。この川は時に蛇行しながら、川沿いに段丘を形成し、坂上・中尾地区では、比較的広い平坦面がみられる。特にここでは川が大きく蛇行し、あたかも南側に突き出た舌状台地状の地形を創り出している。日当たりも良い。このような場所を、縄文時代の人々は大いに好んだ。集落を営むのに打ってつけの場所というわけだ。また、このような縄文時代の遺跡と、後の平安時代の遺跡が重なる例も多い。実際、後述するように、坂上遺跡でも縄文時代と平安時代の遺物が確認されている。

さらにここは、中世の城としても利用されていたようだ。相木城と呼ばれる、小泉出身の豪族相木氏の根城でもあった。この相木氏は、甲斐から信濃に侵入した武田家の家臣となり、有名な川中島の合戦でも活躍している。現在のところ、遺跡からこの時期の遺物は確認されていないが、これら全体の面積は約107,000㎡に及ぶ。

いずれにせよ、坂上遺跡は長い時代にまたがる広い遺跡として認識されている。

1998年の発掘調査 実は坂上遺跡では、古くから遺物が採集されており、例えば1928年の『南佐久郡の考古學的調査』（八幡一郎）でも紹介されている。

しかし本格的な発掘調査は、1998（平成10）年のことである。村の医師住宅建設に先立ち、面積約60㎡程が発掘調査された。栃原岩陰遺跡を除くと、北相木村内では初の本格的な調査であった。試掘以外は重機も用いず、ほぼ全て手掘りの調査で、7月の夏の始まった時期に、



1998年の発掘調査風景



発掘途中の後期の埋甕

わずか4名ほどで掘り進めた日々を思い出す。この時の60㎡は、遺跡の推定範囲のわずか1%に過ぎないが、その狭い面積から、予想外の多量の遺物が顔を出すこととなったのである。

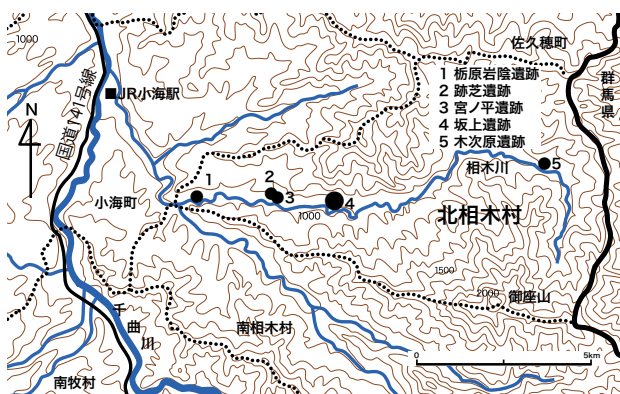
出土した遺物の時期も多様であった。古い順に縄文時代早期（約8000～7000年前）、前期（約7000～5500年前）、中期（約5500～5000年前）、後期（約3500年前）、そして平安時代（10世紀）の土器などが確認された。

坂上遺跡の変遷 では、時期ごとに概要を見ていこう。まず縄文早期であるが、栃原岩陰遺跡とやや時代的に重なるものの、少量の土器が見られるに過ぎない。規模の小さな集落、あるいは仮の宿的な使われ方をしたのだろうか。

続く縄文前期では、約1,500年間の土器が断続的に見られる。特にその前半期では、ここから相木川を遡った木次原遺跡（地元石材のチャートで石鍬を作っていた遺跡）との関連も想定したいが、やはり遺物量は多くはなく、家や墓の跡も見つかっていない。

しかし縄文中期になると、内容がぐっと濃くなる。まず出土した土器の量が段違いに多い。コンテナボックスで80箱以上に及ぶ。さらに、土坑と呼ばれる穴に、派手な突起を持つ土器が埋められていた状況も見られた。

但し不思議なことに、長野県内では一般に、縄文中期では、その前半期よりも後半期の遺跡が多い傾向がある。ところがこの時の調査では、前半期の出土量が圧倒的に多かった。これが遺跡全体の傾向か、たまたま調査した区域がそうだったのか



坂上遺跡の位置



は断言できないが、過去に拾われた遺物も、前半期が多いようだ。おそらくムラが存在していたのだろう。

続く縄文後期も比較的多くの遺物が出土している。特にその前半期に集中する。中には北陸地方の土器もあった。

加えて埋甕と呼ばれる遺構が検出されている。ほぼ完形の土器の中に、底のない無文の土器を重ね、それがそのまま土中に埋められていたのだ（表紙写真も参照）。このような遺構は墓と考えられることが多いが、だとすれば内容量から考えて、小さな子供か、遺体の一部、もしくは白骨化した遺体を埋葬したものでしょう。この時期にもムラが存在した可能性が高い。

その後は平安時代（10世紀）の土器がわずかに出土している。その中には墨書土器がある。墨書土器とは、墨で文字などが書かれた土器のことで、坂上遺跡では日常使う土師器の高台坏に墨の痕があった。ただし解読不能で、文字がどうかも定かではない。

ちなみにこのような墨書土器は、南相木村の大師遺跡や小海町の雨堤遺跡など、南佐久の山間部にも点在しており、この時期には文字を使える人々が生活していたことが分かる。

縄文中期の北相木村 次に最も内容の濃かった、縄文中期に注目してみよう。長野県内ではこの縄文中期の一千年間の遺跡が多い。佐久地域も例外ではなく、標高1300mと高地にある川上村大深山遺跡の他、御代田町川原田遺跡、小諸市郷土遺跡、佐久市寄山遺跡といった大集落、さらに最古の石棒のある小海町穴沢遺跡など、枚挙にいとまがない。日本一の長さ、重量を誇る佐久穂町の北沢大石棒も、おそらくこの頃の所産であろう。

但し、佐久の遺跡が多いと言っても、県内の遺跡密集地帯は、霧ヶ峰の南麓から八ヶ岳の西南麓、つまり佐久とは八ヶ岳を挟んだ西側の地域である。井戸尻遺跡群や尖石遺跡、国宝土偶のある茅野市棚畑遺跡、中ッ原遺跡等々。規模も大きく、数々の優品が出土した遺跡がきら星のごとく並んでいる。

北相木を含め、佐久地域の縄文遺跡と言え、これらの陰に隠れる存在であるが、そんな中、坂上遺跡はどう位置付けられるだろうか。



発掘された縄文中期前半の土器



今も遺跡範囲内に佇む縄文時代の石棒

坂上の土器はなかなかの品 なにしる調査面積が狭いので、住居址が何軒あった集落である、といった評価は難しい。ここでは土器に限定して話を進めよう。

坂上遺跡では、紹介した発掘調査含め、多量の中期土器が発見されているが、これらについて、何人かの研究者がレポートを発表している。

藤森は、数少ない南佐久郡の発掘資料として度々紹介し、地域の土器の変遷を描こうとした。

井出は、阿玉台式土器を取り上げた。阿玉台式土器というのは、東関東に分布の中心がある土器で、大きな四つの突起部や、キラキラ光る黒雲母を胎土に多く含んでいるのが特徴である。坂上遺跡では、この阿玉台式と分類できる土器が出土しており、井出はこれを用いて、関東から中部地方への土器の運ばれ方を考察している。

そして芹沢は、北相木村宮ノ平地区の跡芝遺跡で発見された土器を取り上げたレポートで、坂上遺跡を含む北相木村の中期前半期の土器を「北相木村では、他にも資料化されていない土器がある。今回紹介した土器を含めた、これらの資料を調査研究していく事によって、千曲川上流域におけるモノやヒトの交流の様子を浮かび上がらせる事が出来ていければ」と述べている。

また、現在も当地には、小さな祠の傍らに、縄文中期のものと思われる石棒が祀られている。いつ頃これが発見されたかは定かではないが、おそらく畑の耕作などで、地中から顔を出したのではないかと。やはりこの地には、縄文遺物が色濃く存在しているのだろう。

丁寧に、ていねいに 北相木村は、考古学の世界では栃原岩陰遺跡で知られており、それ以外は目立たない存在であることは否めない。しかし、今回の坂上遺跡のように、面積調査にかかわらず丁寧に取り上げることで、研究の材料とすることができる。

もう一度、足元を見つめてみよう。

主な参考文献

- 北相木村教育委員会 2000『坂上遺跡』
- 井出浩正 2018「旅する縄文土器 —北相木村坂上遺跡出土の阿玉台式土器—」『北相木村考古博物館報』vol.1北相木村教育委員会
- 芹沢一路 2021「跡芝遺跡出土の縄文土器について—縄文時代中期の千曲川最上流域へのアプローチ—」『北相木村考古博物館報』vol.4 北相木村教育委員会
- 藤森英二 2013「東信地域における縄文時代中期土器の動態」『文化の十字路信州』日本考古学協会
- 藤森英二 2019「相木の谷の縄文時代中期土器について」『北相木村考古博物館 Vol.02』北相木村教育委員会



長野県栃原岩陰遺跡から出土した カワシンジュガイ属について

吉永 亜紀子

(総合研究大学院大学 統合進化科学研究センター 連携研究員)

はじめに

栃原岩陰遺跡は、長野県南佐久群北相木村東栃原に所在する縄文時代早期を中心とする岩陰遺跡である。標高約 960m の川沿いに立地している。当遺跡からは約 2,000 点にのぼる貝類遺体が出土しており、そのほとんどを占めるのがカワシンジュガイである（北相木村教育委員会 2019）。カワシンジュガイについては「藤田の分類以後、属内を 2 種に分けて研究されており（小林・近藤 2009）、本遺跡についても両種が含まれる指摘がある（北相木村教育委員会 2019）」と報告されていた。近年、カワシンジュガイ属についてはカワシンジュガイ、コガタカワシンジュガイの 2 種が再同定された（Sakai *et al.* 2022）。本稿では Sakai *et al.* (2022) に従い当遺跡の出土カワシンジュガイの再観察を行なった成果を報告する。

調査対象資料と結果

出土したカワシンジュガイ全点を調査対象として肉眼観察を行った。計測はデジタルノギス（シンワ品番 19979）を用いた。殻頂部が遺存する個体を 1 個体として計数し総計 1,683 点を数えた。ほとんどがカワシンジュガイに同定されたが（図 1）、Ⅲ-1 区下部から前閉殻筋痕上縁が角張ったコガタカワシンジュガイと考えられる個体が 1 点確認された（図 2、表 1、表 2）。

加工痕のある個体では、正円形の穿孔（▲）がある個体（図 3 ①）、半月状に成形された個体（図 3 ②）が確認された。赤色顔料が付着した個体は、既報告において 1 点見つかっており（北相木村教育委員会（2019）・図 4 ①）、赤鉄鉱（酸化赤鉄鉱）の微粉末、所謂ベンガラが付着であると報告されている。当調査では、赤色顔料が外面に付着した個体（図 4 ②）、内面に付着した個体（図 4 ③）が確認された。

カワシンジュガイの平面分布は、出土レベル「中部」「下部」のいずれの時期においてもⅢ区に偏ることが明らかとなった（図 5、図 6）。垂直分布は、出土レベル「中部（中）」「下部」からの出土が多い

※スケールはすべて 10mm

第3次調査
出土位置不明
No.S20 左殻



第5次調査
Ⅱ-2区
-320~-330cm
No.S25-1 左殻



第8次調査
Ⅱ-3区壁際
-380~-390cm
No.S20-2 右殻



第2次調査
Ⅱ区壁際 -264cm
No.S55 左殻



図1 各調査区から出土したカワシンジュガイ



第10次 Ⅲ-1区 No.S12 -500cm~-510cm 左殻

図2 コガタカワシンジュガイ

傾向が看取され（表 3～表 6）、既報告の指摘を追認した。比較的欠損の少ない常設展示ケース内の個体を計測した結果（表 7）、特定のサイズに偏ることなくさまざまな年齢群の個体を採集対象としていたことが示唆された（図 7、図 8）。

表1 遺物出土レベルと時期

出土レベル	時期
上部 0cm~-100cm	縄文早期後葉
中部(上) -100cm~-210cm	
中部(中) -210cm~-350cm	縄文早期中葉
中部(下) -350cm~-380cm	
下部 -380cm~-560cm	縄文早期前葉

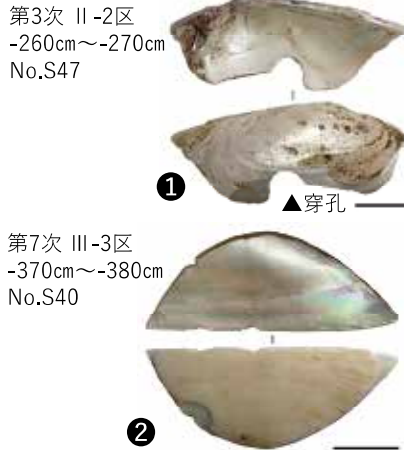


図3 加工痕のあるカワシンジュガイ



図4 赤色塗彩のあるカワシンジュガイ ※スケールはすべて10mm

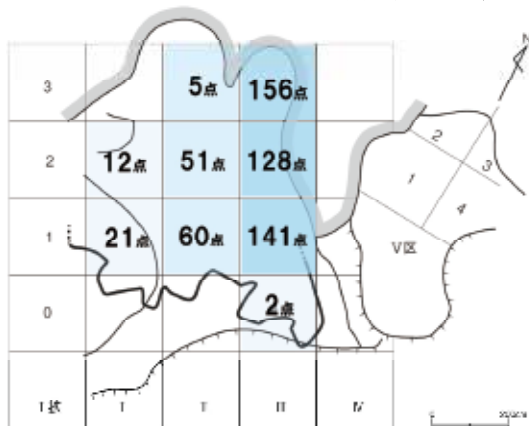


図5 「中部」出土カワシンジュガイ分布

表2 カワシンジュガイ属観察表

I-0区	II-0区	III-0区
下部 L5,1(焼) R6 不明 R1	下部 L4,R2 不明 R1	中部(中) L2 下部 L8,3(焼) R2,3(焼)
I-1区	II-1区	III-1区
中部(中) L5,4(焼) R9,3(焼) 不明 L4,R1	中部(中) L25,6(焼) R21,5(焼) 中部(下) L3 下部 L15,7(焼) R23,7(焼)	中部(中) L38,15(焼) R50,20(焼) 中部(下) L7,3(焼) R7,1(焼) 下部 L54,17(焼) R73,17(焼) 下部 コガタカワシンジュガイL1
I-2区	II-2区	III-2区
中部(中) L3,3(焼) R4,2(焼) 不明 L1,1(焼)	中部(中) L13,12(焼) R18,5(焼) 中部(下) L3 下部 L26,9(焼) R24,8(焼)	中部(中) L57,22(焼) R36,13(焼) 下部 L65,18(焼) R88,27(焼) 不明 L1,1(焼) R3,4(焼)
I区	II-3区	III-3区
中部(上) L6,1(焼) R5 中部(中) L1,1(焼) R2,1(焼) 中部(中) B溝 L3(焼),R1(焼) 中央遺構面 L1(焼),R1(焼) 人骨より高い部分 L1,R1 配石南側壁寄り L1 灰層内 L1(焼) 西壁寄り L1(焼) 不明 L1,1(焼) R2	中部(中) R1(焼) 中部(下) L4(焼) 下部 L26,9(焼) R24,8(焼) 不明 L1,1(焼) R3	中部(中) L63,23(焼) R6,19(焼) 中部(下) L19,3(焼) R16,6(焼) 中部(下) 左右不明1(製品) 下部 L24,5(焼) R27,5(焼) Sec.3 R2,2(焼) Sec.4 L1,1(焼) R2,1(焼) 崩れ L4,1(焼) R4,2(焼) 不明 L7,2(焼) R8
I 拡張区	II区壁際	III区
中部(中) L1	不明 L2,R2	上部 L1,R1 中部(中) L19,15(焼) R12,11(焼) 中部(下) L1 下部 R1 5号人骨の下 L1 不明 R1
I区奥	II区奥	IIIトレンチ
不明 L3,R3,2(焼)	下部 L2(焼),R2,4(焼)	中部(中) L1 中部(下) L1(焼) R1,1(焼) 下部 L5,1(焼) R5,1(焼)
I区合計 94点	II区	III区奥
	中部(中) L35,19(焼) R30,19(焼) 中部(下) L1 I号人骨付近 R2 中央配石下 L5,4(焼) R5 不明 L4,2(焼) R7,2(焼)	中部(上) L3,1(焼) R2,1(焼) 中部(中) L4,2(焼) R4,4(焼)
	II,III区壁	III区合計 1,010点
	下部 L1,1(焼) R4	常設展示 80点
	II区合計 496点	総計 1,683点
	IV区	
	中部(中) L1(焼) 下部 R1(焼) 8号人骨付近 R1	
	IV区合計 3点	

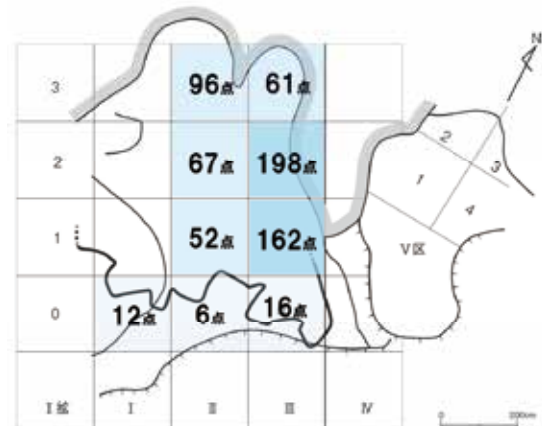


図6 「下部」出土カワシンジュガイ分布

謝辞

資料調査に際しまして藤森英二氏（北相木村考古学物館）に御協力を賜りました。末筆ながら記して感謝申し上げます。

参考文献

北相木村教育委員会 2019 『栃原岩陰遺跡発掘調査報告書』北相木村教育委員会

Harumi Sakai, Yoshihiro Kurihara, Tomoki Furu'uchi, Ayumi Okada, Motoi Takeuchi, Wataru Kakino, Yusuke Suda and Akira Goto 2022 Re-identifications of Two Freshwater Pearl Mussel Species Distributed in the Kamchatka-Sakhalin-Kuril-Japan Region Based on Morphological Comparison of Type Specimens (Bivalvia: Margaritiferidae) VENUS 80 (3-4): 47-66

表3 I区レベル別カワシンジュガイ出土数

出土レベル	I-0	I-1	I-2	I-3	I 拡張	I 奥	計
上部							
中部 (上)				12			12
中部 (中)		21	12	9	1		43
中部 (下)							
下部	12						12
レベル不明	1	5	2	11		8	27
計	13	26	14	32	1	8	94

表4 II区レベル別カワシンジュガイ出土数

出土レベル	II-0	II-1	II-2	II-3	II 壁際	II 奥	II	II,III 1壁	計
上部									
中部 (上)									
中部 (中)		57	48	5			103		213
中部 (下)		3	3	96			1		103
下部	6	52	67			8		6	139
レベル不明	1			5	4	31			41
計	7	112	118	106	4	8	135	6	496

表5 III区レベル別カワシンジュガイ出土数

出土レベル	III-0	III-1	III-2	III-3	III	III トレンチ	III 奥	計
上部					2			2
中部 (上)							7	7
中部 (中)	2	123	128	111	57	1	14	436
中部 (下)		18		45	1	3		67
下部	16	162	198	61	1	12		450
レベル不明			9	37	2			48
計	18	303	335	254	63	16	21	1010

表6 IV区レベル別カワシンジュガイ出土数

出土レベル	IV	計
上部		
中部 (上)		
中部 (中)	1	1
中部 (下)		
下部	1	1
レベル不明	1	1
計	3	3

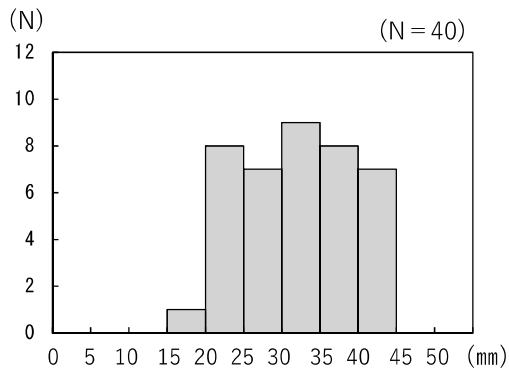


図7 常設展示カワシンジュガイ殻高分布

表7 常設展示カワシンジュガイ観察表 (計測値: mm)

調査年次・No.	左右	殻長	殻高	調査年次・No.	左右	殻長	殻高
第2次 S21	L			発掘年不明 S21	L		29.0
第3次 S20	L	68.6	32.8	発掘年不明 S22	L	63.8	
第3次 S21-1	L	57.6	26.8	第2次 S21-1	R	68.5	32.4
第5次 S25-1	L	73.1	35.1	第2次 S21-2	R	58.9	
第7次 S20	L		36.7	第3次 S20-8	R		31.9
第7次 S21	L		24.0	第3次 S21-2	R		39.6
第7次 S26	L			第3次 S26-1	R	71.4	33.4
第8次 S20	L	41.5		第3次 S26-2	R		28.2
第8次 S20-1	L	58.2		第4次 S25	R	59.7	
第8次 S20-10	L		29.0	第5次 S25-2	R	64.0	30.6
第8次 S20-11	L	32.0	16.4	第5次 S26-1	R	62.6	
第8次 S20-16	L			第5次 S26-2	R		
第8次 S20-18	L	39.8		第8次 S20	R		37.0
第8次 S20-19	L	39.8		第8次 S20-12	R		
第8次 S20-20	L			第8次 S20-13	R		31.0
第8次 S20-21	L			第8次 S20-14	R		17.7
第8次 S20-28	L			第8次 S20-15	R		
第8次 S20-29	L			第8次 S20-17	R		25.6
第8次 S20-31	L	41.0		第8次 S20-2	R	39.7	19.4
第8次 S20-32	L	42.2		第8次 S20-22	R		
第8次 S20-34	L	41.3		第8次 S20-23	R		
第8次 S20-36	L			第8次 S20-24	R		20.7
第8次 S20-37	L	36.6		第8次 S20-25	R		16.5
第8次 S20-38	L		20.1	第8次 S20-26	R	34.6	
第8次 S20-39	L	33.8		第8次 S20-27	R		15.5
第8次 S20-4	L		27.9	第8次 S20-30	R		21.5
第8次 S20-41	L		17.3	第8次 S20-32	R	40.2	20.2
第8次 S20-42	L	27.5	14.2	第8次 S20-33	R	33.9	18.5
第8次 S20-5	L			第8次 S20-35	R		20.4
第8次 S20-6	L		29.9	第8次 S20-40	R		
第8次 S20-9	L		24.8	第8次 S20-43	R		
第9次 S20	L		40.0	第8次 S20-44	R		16.7
第9次 S20	L			第8次 S20-7	R		31.1
第9次 S20-1	L	75.5	35.2	第9次 S20-2	R		
第9次 S20-3	L			第9次 S29	R		
第10次 S1	L		28.6	第10次 S28	R		25.1
第10次 S30	L			第10次 S29	R		39.0
第10次 S31-2	L			第10次 S3	R		
第10次 S31-3	L			第10次	R	58.5	
第10次 S37-1	L			計			80点



図8 常設展示カワシンジュガイ(スケール15cm)

栃原岩陰遺跡出土縄文早期土器の蛍光 X 線分析

主に縄文早期の遺跡として知られる栃原岩陰遺跡からは、早期初めから後半期まで、様々なタイプの土器が出土していますが、土器を形作る“粘土”から、その産地を探る研究が進められています。ここでは、これにかかわる分析の途中経過をお知らせしたいと思います。

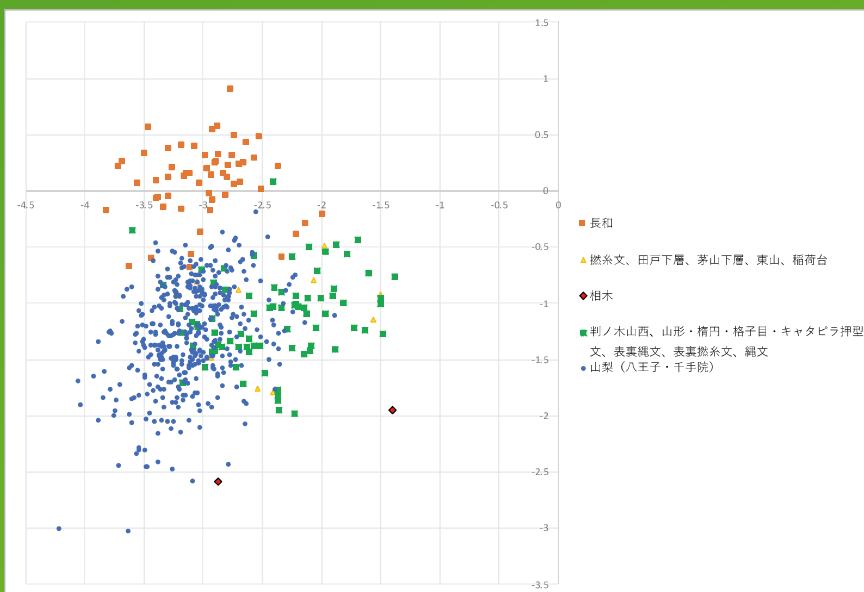
研究の目的と方法

栃原岩陰遺跡では、縄文時代早期（約11,000～8,000年前）の土器が大量に出土しています。これらは基本的に、日常使う「鍋」ですが、土器からは様々なことが分かります。これまでは、器としての形や模様、作りから、時代や地域を示す「モノサシ」としての研究が主でしたが、近年では、こびり付いたお焦げ（炭化物）からその年代や内容物が判明するなど、科学的な研究もなされるようになってきました。

栃原岩陰遺跡には、飛騨地方や関東地方産と言われている土器もありますが、果たして本当の産地はどこか。また、地元産と言われる土器でも、実際に何処で作っていたかは分かっていません。そんな中2023年、山梨県の帝京大学文化財研究所により、栃原岩陰遺跡の土器について、蛍光 X 線分析装置を使った胎土分析が行われました。これは、X 線を使って土器を構成する成分を特定し、その土器（粘土）の産地を探る研究です。

現在分析結果を解析中ですが、同じく長野県内の長和町の土器や山梨県甲府盆地の土器と成分の比較を行っています。同一遺跡（地域）の土器は成分的にある程度のまとまりを持つことが確認できましたが、これらが土器の文様ごとに異なるまとまりに細分化されるのかなど、さらなる解析が必要です。詳しい成果は今後お知らせしていきますが、栃原岩陰を利用した人々の行動範囲や交流の様子が分かってくるかも知れません。

図で提示したデータは栃原岩陰遺跡出土土器（早期）、長和町内出土土器（滝遺跡、明神原遺跡、



中期前葉～中葉)、山梨県内出土土器（山梨市八王子遺跡、甲州市千住院前遺跡、中期後半）の解析データを比較したものです。これによると、地域的に分布領域が分かれる傾向が見られることから、粘土成分の分析から土器の産地が明らかにできると考えられます。また土器型式によっては地域領域から外れるものがあり、土器の移動（搬入、搬出）現象を推測できそうです。

(藤森英二：当館学芸員、金井拓人・櫛原功一：帝京大学文化財研究所)

分析に用いた蛍光 X 線分析装置

北相木村にみんなで来ました～!

昭和女子大学 歴史文化学科の みなさん



スペースをお借りして、水洗作業を実施した。

水洗方法の手順は以下である。水洗する量は水を入れた計量カップで体積を計り(最大500cc)、まず水より軽い浮いた遺物をネットなどで回収する浮遊選別を行った。

その後、沈殿物を4mm目と1mm目の篩で水洗するという水洗選別法を実施した。

野外での堆積物の水洗作業は学生にとっても初めての体験で、作業に慣れるまでに少し時間を要したが、約半日でほとんどの資料を水洗できた。博物館のさま



ざまな道具をお借りし、作業も手伝っていただいたおかげである。

翌日、堆積物が乾いた後、博物館内で4mm目の篩に残ったものを肉眼と拡大鏡を用いて仕分け、骨や炭化物を抽出して、炭化物のみを持ち帰ることにした。1mm目の篩に残った土塊などは乾燥すると幾分細くなるので、再度1mm目の篩を用いて乾燥篩がけを行い、1mm目未満とそれ以上とに分類した。ここまでの作業を博物館で実施し、浮遊物と1mm目の篩で回収された残滓は明治大学黒耀石研究センターにて実体顕微鏡下で観察、同定を行った。

現在最終的な同定結果をまとめているところであるが、縄文時代早期前葉の段階で、堅果類のオニグルミとクリ、クヌギ節、液果類のブドウ属とエゾエノキ、キハダ、ミズキ、マタビ属、そしてマメ類のダイズ属とアズキ亜属の存在が確認できた。前回と比較して、キハダの果実や種子が新たに13試料中9試料から得られた点が大きな成果である。キハダの果実は食用になるほか、薬用にもなる。炭化している点から、加熱されて利用された可能性がある。ミズキも同様な利用が推定され、食用植物以外に利用された可能性がある果実が縄文時代早期前葉から確認できた点は重要である。

また、野生種のソルマメサイズのダイズ属種子も新たに複数試料から確認された。すでに確認されていたアズキ亜属と合わせて、縄文時代中期には信州で頻繁に出土するマメ類の祖先野生種が縄文時代早期前葉に確認され、重要な成果が得られた。作業にあたり、さまざまな便宜を図っていただいた藤森英二さんに感謝したい。(佐々木由香)

2023年8月、北相木村考古博物館に大学生がやって来ました。
彼女たちは、何しに北相木村に?

2023年8月。ついにその時が来た。コロナ禍でオンライン授業を余儀なくされた2020年から3年の間、考古学の授業を受講する学生にどうかして遺跡や遺物を体感してもらいたくて、標高約1000mに立地する北相木村考古博物館とオンラインで繋ぎ、学芸員の藤森さんをお願いして栃原岩陰遺跡の紹介や遺跡の紹介をしていただいた。映像から流れる博物館の風景やリアルな遺物、博物館から見える外の山並みは刺激的な映像だった。受講生からは現地に行ってみようという感想が最も多く、いつか学生を連れて行きたいと思っていたが、ようやく数名の学生と訪れることができた。

北相木村考古博物館には、栃原岩陰遺跡の発掘調査ときに柱状に採取された土壌サンプルが木箱に収納されて残っている。灰質の堆積物には動物遺体が良好に残存していたが、炭化物も多く含まれていた。2019年に博物館が実施した炭化種実の同定では、約1万年前のオニグルミなどの堅果類やアズキ亜属などのマメ類の存在が明らかになっている。これは、岩陰遺跡に住む人々の植物利用を示す非常に貴重な実物資料である。

ただし、2019年の分析では1箱あたり1000ccの堆積物を水洗したのみで、木箱の中には多くの堆積物が残っていた。追加して堆積物を水洗すれば、より多種類の種実の利用を明らかにできる可能性がある。この堆積物の水洗を行うため、

修士論文で縄文時代早期の植物利用を扱う國學院大学大学院生(当時)の吉田仁香さんと昭和女子大学歴史文化学科で環境考古学を受講して土壌水洗のスキルを習得した学生4名と共に訪れたのである。

念願の遺跡や博物館展示、収蔵庫の見学をさせていただいた後、木箱の堆積物をチェックし、博物館前の



柱状試料から得られた炭化種実
(左からキハダ果実、キハダ種子、ミズキ核、マタビ属種子) スケール1mm

五十嵐ジャンヌ 著

『洞窟壁画考』

五十嵐ジャンヌ氏は、

旧石器時代（およそ40,000～15,000年前）の、ヨーロッパを中心とした洞窟壁画の研究者である。

実は当館とも縁がある。そもそもは故あって当館学芸員と洞窟壁画の模型作りを行なった経緯があったが、その後2017年の「栃原ロックフェスティバル」には講師としてお招きしている。そこでは世界遺産ラスコー洞窟の壁画を中心に、氏が研究されているヨーロッパ各地の洞窟壁画と、そこから考える旧石器時代人の意識や、人類にとっての芸術の意味などを、分かりやすく解説して頂いた。さらには、マンモスの絵を描くワークショップも開催。一見難しそうだが、五十嵐氏の観察から得られた共通の要素を教わってチャレンジすると、容易に壁画風マンモスが描けるのが不思議であった。

さて本書は、氏が長年にわたり研究を続けてきた旧石器時代の洞窟壁画について、その研究の歴史や最新の情報にも触れつつ、描かれた動物・記号の種類、描いた道具や方法を解説しながら、彼らが壁画を描いた背景や理由、そして我々人類と美術の起源などを広く紹介していく。まさにこの一冊で、洞窟壁画研究の今を知ることができる。

尚、上記のワークショップで語って頂いたマンモス壁画の特徴、具体的には突き出た頭部、キノコ型の足、目の表現などが、実は旧石器時代末のマドレーヌ文化期、フランスはヴェゼール渓谷付近の特徴だ



と知ることができた。

また五十嵐氏は『なんで洞窟に壁画を描いたの?』という本も出されている。こちらはフィクションであるが、中学生の少女が、フランスなどの実在の遺跡を研究者らと旅するという、親しみやすい内容でありながらも、洞窟壁画の謎に迫る、お勧めの一冊である。

ぜひ、旧石器時代の洞窟壁画に想いを馳せ、歴史を紐解く興奮を味わってほしい。

- ★『洞窟壁画考』 青士社 4,500円（税別）
- ★『13歳からの考古学
なんで洞窟に壁画を描いたの？
美術のはじまりを探る旅』
新泉社 2,000円（税別）

佐々木由香さん「尖石縄文文化賞」受賞 おめでとうございます！

栃原岩陰遺跡の植物遺体分析でもお世話になり、本誌 Vol.3ではインタビュー記事にも登場、本号でもレポートを頂いた佐々木由香さんが、令和5年「第24回宮坂英弉記念尖石縄文文化賞」を受賞されました。この賞は、尖石遺跡の調査に尽力した宮坂英弉氏の業績を讃え、縄文時代研究に功績のあった優れた個人や団体に贈られるものですが、佐々木さんは、**植物考古学という分野を切り開いた一人**と言え、国内外各地でのご活躍は、まさに受賞にふさわしいものです。

これからのご研究の進展を祈念しつつ、当館へのご協力も、よろしくお願いいたします。

北相木の縄文遺跡が実はすごかった

井戸尻考古館

を訪れるお客様というのは、

全く歴史に関心がない観光客というよりは、やはり縄文好きの方が多いのではないかと思います。しかも相当なマニアだったりします。遠方から縄文目当てで井戸尻を訪ねる方は、たいていは尖石縄文考古館（茅野市）とセットで日程を組んでいます。縄文目当ての方々なら、そこに北杜市考古資料館（北杜市）か八ヶ岳美術館（原村）が加わる、というのが一般的なコースでしょう。

お客様をご案内すると、聞かれることがあります。「他にお勧めの博物館はないですか？」と。お客様のその後の予定や好みによって、釈迦堂遺跡博物館（笛吹市）や黒耀石体験ミュージアム（長和町）、平出博物館（塩尻市）、浅間縄文ミュージアム（御代田町）になることもありますが、井戸尻に来る縄文マニアならば、この辺りはまず押さえているもので



富士見町井戸尻考古館には、5500～4500年前の土器の優品が並ぶ。

す。「来たな」と心の中でニヤリとしながら、厳かに言うのです。「北相木には、行きましたか？」

これは編集者に対するリップサービスでも忖度でもなく、純粹に心からの推薦。「北相木村考古博物館に行って、展示してある針を見ろ」と言うのです。井戸尻考古館でゴテゴテした装飾の中期の土器と、そこから読み解く精神世界に触れた人の心にこそ、この北相木の遺跡は刺さります。

井戸尻考古館には、有機質の遺物がほとんどありません。骨角製品がないのです。あるのは石器と土器ばかり。当然のことですが、石器や土器は縄文人の生活用具のごく一部でしかありません。この何倍もの木製品や蔓・樹皮製品、漆器、骨角器があったはずなのです。井戸尻考古館では以前より、縄文人の生活を再現しようと試みてきました。道具を自分でつくり、使い、廃棄する。そこから縄文人に近づこうという研究スタイルでした。けれど、骨角器はないのです。これでは再現しようにも、他の遺跡の出土品を参考にするしかありません。

それを可能にしてくれるのが、栃原岩陰遺跡の出土品です。このマガジンの読者にいまさら栃原岩陰遺跡や北相木村考古博物館の話をする必要はありませんね。そういうことなのです。

栃原岩陰遺跡

には思い入れもあります。

縄文よりは恐竜にあこがれを抱いていた幼いころ。なんという本だったか忘れてしまいましたが、岩陰の縄文人の話を read したので。雨の降る日に留守番をして、仲良く遊んでいた幼い兄弟（姉妹）。とつぜん岩陰の大岩が崩れその岩の下敷きになって死んでしまう、という悲しい話でした。骨の周りにはムクノミやシンジュガイ、カタツムリの殻が散らばり、ムクノミを食べながらシンジュガイやカタツムリで遊んでいたのだと書かれていました。なんてかわいそうな！…泣きました。小

という文

松少年の純な心に、栃原の名前は悲劇の遺跡として刻まれたのです。

そして先ほどの針。井戸尻考古館に就職して、縄文人に近づこうとしていた時、考古博物館を見学して、そのスゴさが本当に胸に突き刺さったのです。縄文早期の岩陰に暮らした人々が、この精巧な針で縫っていたものとは何か。そして昼前の陽が差し込む岩陰で、子どもらに「危ないから遠くへ行くんじゃないよ！」などと声をかけながら、せっせと繕い物をしていたのは誰だったのか。時には指先を刺してしまい、慌てて口にくわえて眉をしかめていたのは、どんな人だったのか。そんな思いが次々とあふれてくるのでした。

近年、井戸尻考古館の職員ら連れて、見学に訪れたとき、藤森英二学芸員にそんな話をしたのですが、「んー、落盤事故とは言い切れないし、カタツムリは遊んでいたのではないかもしれない」「針だと思うけど、これで革を縫えたのかなあ」…。少年の涙は、あふれ出した縄文人の姿はいったいどこへ。藤森さんは私と違ってしっかりした研究者で学芸員ですから、妄想では話さないのです。

けれどそこには確かな人の営みがあって、川を遡上するサケの事や、今では北海道にしか生息しないイトウ科の魚骨の存在。遠く南の海から運ばれた貝のことなどをロマンたっぷりに話してくれました。丁寧で、学際的な研究から描き出す栃原岩陰の縄文人の姿が、そこに見えてくるようでした。



栃原岩陰遺跡出土の骨製縫い針。約1万年前のもの。

井戸尻遺跡も含まれる日本遺産「星降る中部高地の縄文世界」は山梨・長野の2県14市町村にまたがる広域で認定された日本遺産です。そこには豪華華麗な土器や、生命への祈りが垣間見られる土偶の優品が並び、まさに日本を代表する井戸尻文化の世界が広がっているのです。が、そこに生きた縄文人の姿が、そこからどのくらい見えてくるのでしょうか。豪華な飾りの土器をたくさん見学して、縄文文化を知った気になっていませんか？

早期と中期という時代の違いや地域性はもちろんありますが、栃原岩陰遺跡を、北相木村考古博物館を見ずして、縄文を語るなかれ。私たちはそこで、大自然の中に生きた縄文人に出会うことができます。



小松 隆史 (Komatsu Takashi)

長野県岡谷市出身。富士見町教育委員会勤務、現在井戸尻考古館の館長を務める。井戸尻考古館といえば、縄文農耕や土器文様の解釈など独自の研究でも知られるが、最新の考古学研究とのバランスを保ちつつ、その独自性も追求している。また稀代のプレゼンターであり、その発表や講演は常に満員御礼。各地にファンがいる、考古学界のスター的存在。

学芸員のフィールドノート

今号では、これまで当館の活動や栃原岩陰遺跡の研究に貢献して頂いた2人の研究者、佐々木由香氏と五十嵐ジャンヌ氏を紹介することが出来た。佐々木氏は尖石文化賞の受賞、五十嵐氏は大著の出版である。どちらもこれまでのご努力の賜物。本当におめでとうございます。

また佐々木氏には、指導されている学生の活躍も記事にさせていただいた。これからの若い力にも期待したいところである。

さらに、各地で地道な調査を続けている、動物考古学の吉永亜紀子氏には、紀要を含めると4本目の報告を寄せて頂いた。毎年、栃原岩陰遺跡の骨資料を引っ張り出し、さまざまな発見をされている。栃原岩陰遺跡に更なる深みを見せてもらっている。

エッセイでは、言わずと知れた井戸尻考古館の小松隆史館長の玉高を頂けた。国重要文化財の土器を含むあれだけのコンテンツを抱えた館にありながら、栃原岩陰遺跡を理解し人に勧めてくれるとのこと、大変にありがたい話である。

巻頭でまとめた坂上遺跡は、私が村での勤務を始めて、最初に本格的な発掘調査を行った遺跡である。村職員として全ての責任を追い、期待よりも不安の方が大きかったが、累々と出土する遺物を前に、やはり胸はときめいたのを覚えている。手伝ってくれたのは、学生時代の仲間だった。あれから二十数年、白髪も増え、スコップを握る力も衰えているが、遺跡に立った時の心のざわめきは、これからも忘れずにいたい。

北相木村考古学博物館学芸員 藤森 英二

2000年発行『坂上遺跡』より 発掘調査時のスナップ写真



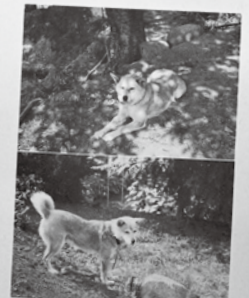
調査区東側、ローム層上面まで調査は及ばなかった。



視乱層、遺物包含層ともに多量の礫を含んでいた。



調査終了。後方に御生山。



心を和ませてくれた調査協力者。

調査風景



北相木村考古博物館

〒384-1201
長野県南佐久郡北相木村2744
☎ 0267-77-2111
<http://vill.kitaaiki.nagano.jp/museum/>

令和5年度 北相木村考古博物館報 栃原岩陰遺跡マガジン vol.07

令和6年3月刊行

企画編集 藤森 英二
(北相木村考古博物館学芸員)
発行 北相木村教育委員会
印刷 中澤印刷株式会社